

## 視察① トータル環境対策を進める臨海地区在宅地を視察

ハンマビー臨海在宅地とは、現在ストックホルムで進められている都市建設プロジェクトのことで、スウェーデン最大級の循環型都市です。

この臨海地域は古くからの港湾工業地帯でしたが、環境に配慮した都市として再開発することになりました。このプロジェクトは1999年度の都市計画の一環として行われており、2010年に完成を予定しています。最終的には居住者と労働者を含めて3万人が生活することになります。すでに一部は完成しており、アパートへの入居が段階的に始まっています。

ハンマビー臨海在宅地は循環型のまちづくりを進めており、環境への影響を従来の都市から半減させることを目標としています。ユニークなリサイクルシステムや下水処理施設を導入しているほか、新しい省エネルギー技術を初めて実用化するなど、スウェーデンの住宅開発における最先端の環境技術を見ることができます。特に、エネルギー、廃棄物、水質の管理を含むトータルな環境対策は、「ハンマビーモデル」と呼ばれ、国内外で注目を集めている対策です。

ハンマビー臨海在宅地の開発では、計画段階でバリアフリーを考慮して都市の設計が行われているほか、保育所、学校、高齢者や障害者に対応した特別な住宅、公園や緑地など公共空間などの充実も図っており、社会サービスを充実させて誰もが住みやすいまちづくりが進められています。

## 視察② 障害者雇用施設

フィンランド障がい者連盟(Finnish Association of People with Physical Disabilities: FPD)がポリオ流行を機に設立したもので、短期リハビリ(1週間から6ヶ月のプログラム)用施設である。施設名称のSynapsiaは脳細胞をつなぐシナプスのことで、「在宅や社会生活」へつなぐシンボルであり、この施設の理念でもある。

代表的な設備である機能訓練室は利用者間のコミュニケーション促進をはかるための大部屋で、同時に約20名の訓練が可能である。

その他、プールやロッククライミングなどの設備が整えられていたり、トレーニングジムでは日本で最近取り組まれているパワーリハビリの原型である各種マシンで訓練されている。

また、退所後の生活を意識した用具に頼らない訓練(手すりのない階段、車椅子の練習コースなど)もされている。

概要：利用者75名(脊髄損傷者40名、その他：脳障がい、ポリオなど35名)

職員185名(医師、理学療法士(PT)、作業療法士(OT)など)

費用 国民保険により本人負担なし

## 視察③ ハブ空港化の ヘルシンキ空港視察

### ◆ヘルシンキ空港(フィンランド・ヘルシンキ)



2016年5月から福岡直行便を開設したフィンエアーの拠点である北欧の玄関口ヘルシンキ空港は、ヨーロッパ60都市以上に効率よくスムーズに乗り継ぐことを重視して設計された空港で、世界的に高い評価を得ています。2019年度の福岡空港民営化に先立ち、北欧のハブ空港的なヘルシンキ空港の運営について、現状や様々な取組を学び意見交換を行います。